

こうちミュージアム ネットワーク通信

March
2008

vol.6

目次

- | | |
|--|---------------------------------|
| P 1…土佐の文化財「牧野文庫」 | P 5…コラム「花・人・土佐 でのい博」 |
| P 2…随想「いわゆる、まんが的なもの」・文化の言葉「博学連携」 | P 6…現場通信「高知県立文学館常設展示リニューアルについて」 |
| P 3…会員紹介「須崎市立図書館」「わんぱーくこうちアニマルランド」「特定非営利活動法人四国自然史科学研究センター」「竹林寺宝物館」 | P 7…展示会批評「西岡瑞穂展」 |
| P 4…活動報告「三館合同企画 坂本龍馬・中岡慎太郎展」
時の話題「指定管理者公募審査を終えて」 | 図書の窓「博物館が好きっ！－学芸員が伝えたいこと－」 |
| | P 8…情報コーナー・会員一覧 |

土佐の文化財

牧野文庫

(高知県立牧野植物園)

牧野文庫の歴史は、今から四十八年前の昭和三十五（一九六〇）年に、牧野家より牧野富太郎博士の蔵書すべてが譲られた事に始まります。蔵書は牧野博士自宅のある練馬から、汽車で数日かけて高知駅まで運ばれ、高知駅から五台山まで白バイの先導によりトラックで運ばれる様子は、さながらパレードのようであったと言われています。帰郷を望みながらもついに叶うこのなかつた牧野博士に代わって、蔵書の帰還となりました。

牧野文庫は、和漢の本草書コレクションでは世界有数とも言われています。このような植物文献の他にも、事前

典、辞書、文学書、地誌、紀行、法制、医学、

薬学、民族学と幅広く蒐集されています。

牧野博士は十八九歳の頃、「緒鞭一撻」

という十五か条の勉強の心得を記してい

ます。その中に「書籍の博覧を要す」「植

学に関する学科は皆学ぶを要す」「書

を家とせずして、友とすべし」とあります。

この心得を実践した結果が、四万五

千点にも及ぶコレクションになったと言えます。

牧野植物園は今年、開園五十年を迎えます。半世紀を記念し「五台山花絵巻」を開催します。牧野文庫の貴重な資料を展示した特別展「日本の花／世界を魅了した伝統園芸」もぜひお楽しみに。

(高知県立牧野植物園司書 村上有美)



写真上：牧野富太郎「オオヤマザクラ」
写真下・右：牧野文庫内のように



※牧野文庫は調査・研究を目的とする場合に、事前の予約申請手続きを経てご利用いただいております。

隨想

いわゆる、まんが的なもの

横山隆一記念まんが館館長 下岡正文

もう三十年くらい前になりますか、大阪・千里の丘に国立民族学博物館というのができて、早速出かけてみたのですが、行つてみて驚きました。ここは世界各地域を対象にした文化人類学・民族学の調査・研究センターで、研究成果や情報は大学や研究機関だけでなく、広く一般市民にも提供していく、ということもうたついていました。展示にも随分、工夫を凝らしていました、と記憶しています。

驚いた、というのは、それらの展示品に「さわってみてください」と、表示が附いたことです。正直、ええ、と思ったですね。それまでの博物館といふのは、さわるな、ふれるな、手を出すな、というあんばいでしたから、これはまさにコペルニクス的転回です。陳列物を遠巻きにして眺めるではなく、ぐっと近づいてさわってみる。ふれることで実感し、体感する。そんなねらいだったのです。「見る」から「さわる」へ。この発想の転換は、その後の博物館の有り様に少なからず影響を与えるのではないか、と素人考えなりに感じたものです。

従来の枠を取り外し、既成概念を追つ払う。この博物館の考え方は、まんがの発想とも似ているのではないか、

と思います。

もつとも、まんが的というと、どこか見下した響きがあるのも確かです。

サブカルチャー（下位文化）なんて呼ばれていました。日常の会話でも「どうもまんがだねえ」とか言う場合、あまり褒め言葉としては使いません。大体、軽く見ている節があります。

ところが、まんが、とりわけコママンガの持つているユーモアとかギャグ、風刺、パロディーといった面白さは常識的な捌き方ではなかなか出てこない。既成のものを排することで、新たなものを作り出す。本質を見極める。人の思いもつかない意外性や物事の深層を描き出す。まんがの力というものは、この辺りから出てくるのではないでしょうか。

自由で自在で奔放。こういうもののとらえ方、というのは高知という風土と切り離しては当然、考えられないと思います。土佐という土壤には、まだ思ひます。土佐といつたものが色濃く残っています。反骨で批判精神に富んでいる、大きさで人を面白がらせるのが大好き——。土佐そのものがまんが的、と言いたいぐらいです。

ですから、少しこじつけ風ではありますが、土佐の地はまんがのみならず、

まんが的なものを生んでいる、と言えそうです。

まんが的なるものを生んでいる、と言えそうです。風刺した即興劇です。世の中を鋭く見事に茶化す。政治問題など実際にシャープに切り込みます。今は姿を消していく土佐テニハもまんが的です。狂句の類なのでしょうか、森羅万象、ことごとくまな板に乗せ、パロディーにする。

似たようなのはまだあります。Tシャツを海浜で展示する砂浜美術館。

本来、屋内で温度、湿度を管理すべき美術館の発想を百八十度変えて野外で開く。自然の中の美術館。べく杯というのもありますね。安定してなくてはならない容器が円錐形だったり穴が開いている。あえて不安定さを求める。置けない酒器でより多く飲みたい呑み助の発想です。百十三連敗した高知競馬のハルウララ人気。連勝馬ならともかく負け馬が人気者になる。よそでは考えられないまんが的、土佐的現象ではないでしょうか。

そんなふうに考えますと、土佐の地にまんが的なものが脈々と流れていると思います。そして、そういう発想をいろんなものに生かせないか、そんなことも考えたいですね。

博学連携

博学とは「いろいろな学問をくわしく知っていること」ですが、ここでは「博物館と学校が連携するという意味です、言うまでもなく連携は「同じ目的を持つものどうしが連絡し、協力しあって物事をすること」です（ともに福武国語辞典より）。最近はこの「博学連携」が大流行、学校に博物館が出向たり、来館時に体験講座をしたり……という事業をされている館も多いはず。しかし、現実には学校に「内容はお任せします」といわれ、館は決まった作業をしていくだけのことも少なくないような…これが「協力しあって物事をする」ということ。

さて、先日、高知市立横内小学校で開催された図書館大会では、児童たちの調べ学習の発表と一緒に星立美術館で開催された日曜市の資料を再活用していただきました。その関連で、絵本作家・西村繁男さんのご厚意で絵本原画展を開催した折に学芸員が向き、展示アドバイスを行つことになったのですが、担当教員の方は「お任せします」ではなく、趣旨や具体的なイメージやアイディアを話し、一緒に相談しながら進めていきました。わずかなことしかできていませんが、少しでも「協力しあうことができた」という意味で「博学連携」になつたのではないでしようか。

単純に互いが行き来することが「博学連携」といわれる段階はおしまい、具体的にどんなことができるか、何をすべきかを、共に考えていくことが、これから求められる「連携」だと思いますが、いかがでしょうか？

須崎市立図書館

今では、幻となつた「日本かわうそ」で知られる須崎市。ところが、藩政時代より高知県中西部の政治・経済・文化の中心地として栄えてきた史実は、意外に知られていないようです。幕末には、坂本龍馬をはじめ多くの勤皇の志士達が須崎の町に集まりました。

この地に、大正四(一九一五)年坂本重寿須崎尋常小学校校長が大正天皇御即位記念として学校内に児童文庫を開設したのが須崎市立図書館の前身、すなわち須崎町立図書館の濫觴と云われています。

特筆すべきは、先人達の遺した平等感覚あふれる「図書館だより」の惹句です。大正八年(一九一九)のそれには、このように書かれています。

「お出なさいや図書館へ、お金はいらず心配いらず、階級もない差別もない、真に民衆平等で、思う存分読書ができる。お出なさいや図書館へ、日曜も休みなし、開館八時、閉館四時男女老人子供でも」

社会教育施設をめぐる状況は、年毎に厳しくなっています。しかしながら、図書館が人権教育の担い手であることは変わりありません。先人達のメッセージを活かしたサービスをこれからも展開したいと考えています。

(須崎市立図書館館長 宮崎 香)

わんぱーくこうちアニマルワンド

わんぱーくこうちアニマルランドは、今現在九十二種三百四十点の動物を展示しています。毎日(夏場七月から九月を除く)十時三十分から十五時三十分までふれあい広場でのヤギやウサギ、モルモットとのふれあいや、日祝日のワンポイントガイドでは担当者により展示動物の生態や習性、苦労話等二十分程度のガイドを行っています。このようにすこしでも来園者の方に楽しく動物に対する知識を深めていただける様に努めています。給餌の時間には(土曜日十五時オオサンショウウオ、日曜日十五時メガネカイマン)動物舎の前は人だから、特に全長二メートルのメガネカイマンが餌を食べる時は大変な人気です。その他、動物園の役割である動物の研究や種の保存として、展示動物だけではなく「オオイタサンショウウオ」の生息地での保護、調査研究「オオサンショウウオ」の調査、研究も行っております。社会教育に関する「ヤマネ」の調査、研究も行っております。社会教育に関しては、八月にサマースクール(小学生四五、六年生を対象)十二月に動物セミナー又、中学、高校生の職場体験も年間十五校(十九年度)ほど受け入れております。

(わんぱーくこうちアニマルランド 清家晴男)



会員紹介

竹林寺宝物館

わんぱーくこうちアニマルランドは、今現在九十二種三百四十点の動物を展示しています。毎日(夏場七月から九月を除く)十時三十分から十五時三十分までふれあい広場でのヤギやウサギ、モルモットとのふれあいや、日祝日のワンポイントガイドでは担当者により展示動物の生態や習性、苦労話等二十分程度のガイドを行っています。このようにすこしでも来園者の方に楽しく動物に対する知識を深めていただける様に努めています。給餌の時間には(土曜日十五時オオサンショウウオ、日曜日十五時メガネカイマン)動物舎の前は人だから、特に全長二メートルのメガネカイマンが餌を食べる時は大変な人気です。その他、動物園の役割である動物の研究や種の保存として、展示動物だけではなく「オオイタサンショウウオ」の生息地での保護、調査研究「オオサンショウウオ」の調査、研究も行っております。社会教育に関しては、八月にサマースクール(小学生四五、六年生を対象)十二月に動物セミナー又、中学、高校生の職場体験も年間十五校(十九年度)ほど受け入れております。

(わんぱーくこうちアニマルランド 清家晴男)



このうち「野生生物の基礎調査・研究」の一環として、地域の生物相を総合的に把握する「生物総合学術調査」を横浪半島(土佐市、須崎市)で設立以来展開しています。今年の三月にはその成果を発表するため、企画展「横浪半島の自然」を越知町横倉山自然の森博物館において開催します。会場には調査の過程で作製した標本と写真を多数展示します。人間のすぐそばに、とても多くの生きものたちがいることを知つてもらえたなら嬉しいです。

(四国自然史科学研究センター 谷地森秀二)



特定非営利活動法人 四国自然史科学研究センター

四国自然史科学研究センターは、平成十五(二〇〇三)年四月に設立されたNPO法人です。設立の目的は、四国地方の自然史に関する調査研究、普及啓蒙活動を通じて、自然環境保全及び復元、地域の経済的、社会的、文化的な発展に寄与することとしています。現在事務所は須崎市下分の新荘公民館内に構え、「野生生物の基礎調査・研究」、「地域生態系の保全と環境の復元」、「四国の自然史科学研究の拠点の構築」、「後継者育成」「傷病野生動物の救護」などの活動を行っています。

このうち「野生生物の基礎調査・研究」の一環として、地域の生物相を総合的に把握する「生物総合学術調査」を横浪半島(土佐市、須崎市)で設立以来展開してきました。今年の三月にはその成果を発表するため、企画展「横浪半島の自然」を越知町横倉山自然の森博物館において開催します。会場には調査の過程で作製した標本と写真を多数展示します。人間のすぐそばに、とても多くの生きものたちがいることを知つてもらえたなら嬉しいです。

(四国自然史科学研究センター 谷地森秀二)

文化財指定仏像十七体を奉安し、その数は県下の国重文指定の仏像のおよそ三分の一に相当するといわれます。当館ではこうした先人から伝えられた貴重な文化財を後世に守り伝えていくとともに、今後も仏像という祈りの形を通して訪れる方々に日本人の信仰の美と心を伝えていきたいと考えております。

(竹林寺宝物館長 海老塚和秀)

詩とメルヘン・「花」展 香美市立やなせたかし記念館 仙波美由記

やなせたかし記念館・詩とメルヘン絵本館では、七月十六日から九月二十三日まで「詩とメルヘン『花』」展を開催致します。本展は今夏、詩とメルヘン絵本館が開館十周年を迎えることを記念し、また県下で開催される「花・人・土佐でいい博」の一環として、県外から訪れる方たちを当館なりの「花」でお出迎えしようと、「花」をテーマにした詩と絵のコラボレーションで開催する特別展となります。

会場では、全国から応募のあった「花」をテーマにした八百九十七通の詩の中から、やなせたかしによつて選ばれた入選作五十作品ならびに谷川俊太郎氏・黛まとか氏など月刊『詩とメルヘン』で縁のあつた詩人の方から出展いただいた詩に、同誌でおなじみの永田萌氏・味戸ケイコ氏・宇野亜喜良氏・黒井健氏など約七十名の人気イラストレーターの方々が挿絵を添え、一つの

作品として展示致します。

十周年を迎える当館で「詩」と「絵」の「花」から生まれる新たな「花」の作品世界を、県内外の多くの皆さんにご覧頂けることを願っています。



図書館で出会う！花・人・土佐

高知県立図書館 渡部若世

あつたかで、寛げて、もう一回行つてみたくなる土佐：私はこんなイメージで「花・人・土佐でいい博」に参加することになりました。そこにどうやって図書館をからませるか：以下私たちの「花・人・土佐でいい博」+図書館の取り組みをご紹介します。

1. 展示コーナーの充実（年中）

県内全ての市町村の「花」のパネルを作成します。さらに図書館ならではの取り組みとして、花あれこれ、豪華美麗な写真集も併せてビジュアル系の展示をします。

2. 「そもそも、土佐に行かんかえ？（仮題）」の発刊（二〇〇八年春発刊予定）

図書館員が独断と偏見で選んだ、O P A C 検索では調べることのできないコアな土佐本リストの紹介。ここでとりあげた本も隨時展示していきます。

3. こうちミュージアムナビゲーション（年中）

県立図書館では從来から県内文化・観光施設のご案内をしてまいりました。このたびそれをさらに充実。一階ロビーを中心に各施設の紹介コーナーを大展開。ネットワーク参加館の皆様も、新しい情報がございましたら、どしどし県立図書館までご一報ください。

土佐のまほろばカルチャーオーディング 高知県立歴史民俗資料館館長 宅間一之

高知県立歴史民俗資料館、その周辺は高知県内一の史跡や文化財の宝庫です。この土佐のまほろばに住む人たちと連携し、これらの文化遺産への理解を深めつつ、その成果を広く発信して地域の活性化もはかるうと行動を始めました。岡豊・国府の地元地域・教育文化施設・商業施設とも連携し、「知ろう、歩こう土佐のまほろば」をめざします。秋の「花・人・土佐でいい博」への協賛事業として「土佐のまほろばカルチャーオーディング（仮称）」も実施すべく、「土佐のまほろば地区振興協議会」設立の準備会議も終わりました。この事業を発展継続し、国府や岡豊地区の史跡や文化財めぐりのコースやウォーキングコースの設定と、その解説ボランティアの育成もめざします。

多くの人たちに岡豊山・岡豊城跡・高知県立歴史民俗資料館を一体としてご理解をいただくこと、それは地域の人たちにより深いご理解をいただくことよりはじめます。薄かつた地域との連携を深めつつ、地域振興とともに、歴史民俗資料館のこれから姿を摸索しつつ、明るい展望をもちたいと思っています。

コラム

あつたか高知は春ざかり
花・人・土佐

でいい博 2008



花・はな・華

上佐山内家宝物資料館 尾本師子

山内資料館の平成二十（二〇〇八）年度展示は特設展「花・はな・華」で始まります。所蔵資料の中から、花をあしらった江戸～明治時代の

美術工芸品約五十点を選んでの展覧会です。絵画・茶道具・化粧道具・武器武具と、制作年代も技法も異なっているにも関わらず、おひただ

しい資料に花のモチーフが使われていることには驚かされます。これも人と花との関わりの深さ・豊かさを物語つているのでしょうか。展示会場ではそれぞれの文様に託された人々の想いや願いが伝わるような解説を心がけています。また関連行事とともに、歴史民俗資料館のこれから姿を模索しつつ、明るい展望をもちたいと思っています。



花・はな・華

上佐山内家宝物資料館 尾本師子

山内資料館の平成二十（二〇〇八）年度展示は特設展「花・はな・華」で始まります。所蔵資料の中から、花をあしらった江戸～明治時代の美術工芸品約五十点を選んでの展覧会です。絵画・茶道具・化粧道具・武器武具と、制作年代も技法も異なるにも関わらず、おひただ

しい資料に花のモチーフが使われていることには驚かされます。これも人と花との関わりの深さ・豊かさを物語つていることには驚かされます。これも人と花との関わりの深さ・豊かさを物語つていることには驚かされます。これも人と花との関



公文蘆済筆「ちくさももくさ」部分

高知県立文学館では、開館十周年を迎えるにあたり、昨年七月、常設展をリニューアルしました。

これまでの、文学館の常設展示室は、高知における先達の文学者にご指導いただき、「約二百ある日本の文学館の中でも十指に入る」と評価される展示内容でした。

しかし、研究者からは高く評価されるものの、「一般の方々からは『紹介している作家が多い。文言が難しく、字ばかりで見ていて疲れる。』」というご指摘をいたしました。

また、常設展の展示資料は、定期的に入れ替えていましたが、時代順に展示された四十数名の顕彰作家については、変更がなかつたので、観覧者の目には「文学館の常設展示は、十年間変化がない」と映つてしまつたようでした。

今日、文学館は、一定の知名度を得つたります。未だに来館したことのない県民が多くいらっしゃるのも事実です。文学館では、開館十周年を機に、「新しい文学館」として、これまで来館したことのない県民にも、また、来館したことのある県民にも、「文学館に行ってみたい」という気持ちをもつていただけるよう、展示のボリュームの適量化を検討し、一年半から二年を目処に顕彰作家の入れ替えをおこなうこととしました。観覧者の期待が次へと繋がるよう常に展示に変化を持たせ、「静から動へ、変化する文学館」を目指し展開していくこととしました。

そして、今までに造作されている高知の文学をご覧頂きたいと、これまで紹介していなかつた、現在活躍している作家をタイムリーに紹介するコーナーも設けました。

さらに、文学館では平成十八年度以降

の管理運営方針の中で子どもを対象に加えた展示の検討を挙げており、今後の高知県を担う子どもたちを文学の世界に誘うことは、県民文化の振興を足元から支えることとなると考えました。そのため、子どもに解る展示や解説を工夫するだけではなく、これまで無かった「こどものぶんがく室」を新設しました。従来の文学館の展示は、見ることが主体とな

る管理運営方針のなかで子どもを対象に加えた展示の検討を挙げており、今後の高知県を担う子どもたちを文学の世界に誘うことは、県民文化の振興を足元から支えることとなると考えました。そのため、子どもに解る展示や解説を工夫するだけではなく、これまで無かつた「こどものぶんがく室」を新設しました。従来の文学館の展示は、見ることが主体とな

る管理運営方針のなかで子どもを対象に加えた展示の検討を挙げており、今後の高知県を担う子どもたちを文学の世界に誘うことは、県民文化の振興を足元から支えることとなると考えました。そのため、子どもに解る展示や解説を工夫するだけではなく、これまで無かつた「こどものぶんがく室」を新設しました。従来の文学館の展示は、見ることが主体とな

る管理運営方針のなかで子どもを対象に加えた展示の検討を挙げており、今後の高知県を担う子どもたちを文学の世界に誘うことは、県民文化の振興を足元から支えることとなると考えました。そのため、子どもに解る展示や解説を工夫するだけではなく、これまで無かつた「こどものぶんがく室」を新設しました。従来の文学館の展示は、見ることが主体とな

高知県立文学館常設展示 リニューアルについて

現場通信



り、観覧者一人一人が体感できるものではありませんでした。文学を体感するのには、難しいですが、当館の展示空間のデザインは、体感していただくということに注目したものとなっています。

それでは、具体的に館内をご紹介しま

す。

三番目に、「高知県文学マップ」のコーナーを設けました。文学散歩地図です。それぞれの地を舞台に描かれた作品には、風土や人情が生き生きと描写されていますが、その場所でなければ成立しないもの。そこで、県内に点在する顕彰作家の生誕地や、歌碑、詩碑、墓などを高知県の地図の中に落とし込みました。その地図の上を観覧者に歩いていただき、出来れば実際にその場所を訪ね、高知の文学の世界を体感していただきたい。そんな願いをもつて作成しました。

高知の顕彰作家については、これまで同様に時代を追って文学者を紹介していますが、一目で古典から現代までをぐらんいただけるよう内容を精選して、より作家像に迫る展示となっています。また、企画コーナーを設け、折々の情報を提供しています。

なお、文学館の核である寺田寅彦記念室については、現在検討中です。また、資料の一括寄贈をしてくださった宮尾登美子先生の作品を紹介する「宮尾文学の世界」も新しく設けました。そして、一階の「こどものぶんがく室」では、昨年十二月より、毎週第一土曜日に「おはなしキャラバン」を行つており、平均五十人前後の親子連れが足を運んでくださっています。厳つい外観とは裏腹に、子どもさんたちの可愛い声が館内にこだまし、思わず笑顔がこぼれる日々です。定期的に、土佐の民話、昔話や高知の創作童話などの紹介もおこなつており、紙芝居は、実際に子どもたちが演じることがででききるようなコーナーもあります。

「静から動へ」いつも動いている新しい文学館にご注目頂ければと願っています。

（高知県立文学館 津田加須子）

●●展示会批評●●●香美市立美術館
「西岡瑞穂展」

平成19年11月17日～12月24日

香美市立美術館は旧土佐山田町立美術館を母体に、市町村合併を期に現在の施設名となっている。旧町立美術館時代から積極的に展覧会活動を行ない、特に高知県ゆかりの作家については、「土佐山田町」または「香美市」にとらわれることなく、全県下を視野において人選でワンマンショーやグループショーを行っていることは評価すべきである。ともすれば「市町村立」だからということで、その行政単位に関係のある作家やテーマの展覧会しかできないような考えが行政側にあることはいかんともしがたいが、それもとのともしない展覧会のラインナップは素晴らしいと思う。

平成十九（二〇〇七）年十一月十七日から十二月二十四日まで、同館は安田町出身の画家、西岡瑞穂（一八八八—一九七三）のワンマンショウ、「西岡瑞穂展—いごそう」が開催された。筆者が会場を訪れたのは、高知「」を会期の終わり近い十一月中旬のことであった。

西岡瑞穂は県出身の洋画家の中では特筆すべき存在である。東京美術学校（現在の東京藝術大学）を卒業後、長野県の諷訪で美術教師となり、その後パリに自費留学して研鑽を重ね、「ル・サロン」をはじめとする主要な公募展に入選するなど活躍し、帰国後は個展での発表を中心にして独自の画境を極めている。昭和四十八（一九七三）年の没後、アトリエに残された作品はご遺族によって大切に保管されており、近年には専用の収蔵庫も整えられたとの由。今回の展覧会は、もちろんそのご遺族から借用した作品を中心に構成されている。

西岡瑞穂の作品は、アカデミズムに裏打ちされ

た描線の闊達さと、リズミカルな配色の巧みさにより、観るものに小気味良い躍動感を与える。会場には油彩画を中心に四十五点の作品が展示されていたが、天井光とスポットライトが組み合わさ

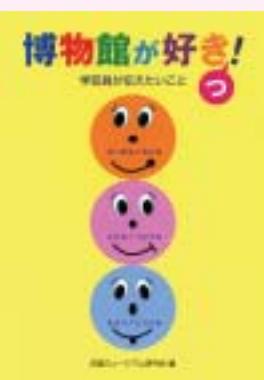


会期中には香美市立美術館の北館長による作品解説会が毎週日曜日に行われ、また作家ご遺族の西岡和子さんによるギャラリートークも行われたのであるが、筆者は勤務の関係で残念ながらそのいずれにも参加できなかつた。特にご遺族による制作秘話などは興味深いものであつたのだが、なんらかのかたちで記録に残していただきたいものである。

記録といえば、この展覧会には目録はあるがカタログは制作されていない。予算的な制約があり、そこまで手が回らないというのが本当のことだとは思うが、このような素晴らしい展覧会にはカタログが欲しいと思うのは筆者だけではあるまい。ついでにもうひとついわせてもらえれば、展示室の壁面の汚損が少々気になるのである。壁の塗り替えは、実のところ莫大な経費がかかるので、筆者の勤務先でも部分的にしか行えないのがだが、せめてクギの穴だけでもパテで埋めて差し上げたいと切に思つた筆者ではあつた。

(高知県立美術館 奥野克仁)

The image shows the front cover of a children's book titled "博物館が好き！" (Museum ga Suki!). The title is written in large, colorful letters at the top. Below it is a cartoon illustration of a smiling orange face with large eyes. The author's name, "著者: 高知ち、高知", is printed vertically along the left edge of the cover.



本書は、その機会を得た四国ミニュージアム研究会の同人たちによつて編まれたものである。二〇〇七年二月の愛媛県で開催された四国ミニュージアム研究会に合わせた形で出版され、六月には徳島県立図書館の文書館ウイークの事業「がんばるミニュージアム」として本書の執筆者四名を招いてシンポジウムが開催されてゐる。

昨年末、二〇〇七年を漢字で表すとしたら「偽」という字になる、というニュースを見た。テレビの情報番組のデータ捏造事件や食品偽装問題などを象徴してのことだとう。そこに欠けていたのは「職業倫理」ではないかと感じる。「職業倫理」は現場の多忙さに流されないために必要なものである。ミュージアムでも同様で、「博物館が好き」という思いがそれを支えているが、ストレートに伝える機会は少ない。

いう場が好きで、そこで働くことを喜びとしている学芸員たちの思いが伝わってくる。現場での様々な場面を紹介することで展示からでは想像しにくいミュージアムの全貌像が見えてくる。

発行後は、執筆した学芸員の間で「館種が違うとこんなに感覚が違うのかと驚いた」という声があつたそうである。思いはひとつであつても、現場での感覚が違う——その

和彦（高知市立自由民権記念館）、徳平晶（高知市春野郷土資料館）、梅野光興（高知県立歴史民俗資料館）、中西安男（わんぱーくこううちアニマルランド）、奥田奈々美（横山隆一記念まんが館）、豊田満広（中岡慎太郎館）、横田恵（絵金蔵）、河村章代（高知県立美術館）の各氏である。それぞれの文に共通するのには、現場での具体例をあげながら「とくに伝えたいこと」が書かれていることである。一読すると、ミュージアムと

7

<span style="position: absolute; left: